

蝶と蛾

経営学部
安藤 聡

蝶と蛾は断じて別な生き物である。私は小学校時代にはかなりの昆虫マニアだったが、とりわけ蝶にはただならぬ関心を寄せていたが、蛾だけはどうしても好きになれず、触ることが出来なかつただけでなく見るのも嫌だった。

アゲハモドキというクロアゲハに似た黒い蛾がいる。ある夏の午後、小学校からの帰り道、妙にぎこちない飛び方をするクロアゲハらしき「蝶」を見かけ、何の気なしに帽子で捕獲したところ、それはアゲハモドキだった。アゲハモドキは蛾だが、クロアゲハに似ているので、その時はそれほど嫌悪感を抱かなかつた。ところが、しばらくその蛾を手を持っていると、次第にそれが蛾であるという事実に耐えられなくなり、怖くなってそのアゲハモドキを手放し、道端の木の葉で手を拭いて、何故か鼻血を出してしまった。蛾に対する嫌悪感や恐怖感と鼻血に因果関係があったのか否かは、今でもわからない。

私が通っていた南永山小学校のすぐ裏には小さな山があり、自然環境にはそれなりに恵まれていたのだが、それゆえに秋になると巨大な蛾が飛来し、校舎の壁面に張り付いていることがよくあった。ヤママユガとかクスサンとかウスタビガとかそういう種類である。私はこれが嫌で仕方がなかつたのだが、生来の負けず嫌いの手伝って、どうしてもこういう蛾が怖いとは言えなかつた。それで、何事もないかのような顔をしてこのような嫌悪すべき鱗翅類が張り付いている壁の近くを通り過ぎ

るときの緊張感は、今でも忘れられない。

中学一年の時、国語の教科書でヘルマン・ヘッセの短編集『蝶』の中の一編「クジャクヤママユ」を読んだ。語り手の「私」に友人のハインリヒ・モーアが少年時代の追憶を語るという設定で、彼ら少年たちは蝶の採集を趣味としていてその標本を自慢し合っていたという。モーアの家は貧しかったので、彼の標本は粗末な空き箱とコルクを再利用したものだったが、金持ちの家の優等生エーミールが作るそれらは実に立派なものだった。ある日、そのエーミールがそれまで誰も採集したことのなかったクジャクヤママユを捕獲した。モーアは彼の部屋にそれを見に行ったときに、まだ展翅板に乗せられていたその珍しい蛾をそっとポケットに忍ばせて盗み出してしまう。家に帰って自責の念に苦しんだモーアは、母親に促されてエーミールに謝りに行く。彼に返そうとしたクジャクヤママユはしかしながら、羽が少しだけ破損してしまっていた。エーミールは怒る代わりにモーアを心から軽蔑した態度を取る。罪悪感と自己嫌悪に耐えかねたモーアは家に帰って、それまで苦労して集めた蝶の標本をすべて泣きながら壊してしまう。

この物語が『蝶』というタイトルの本の中の一編であることはその教科書にも明記されていたし、「私」もモーアも本文中で確かに「蝶の蒐集」などと言っている。だが話題の中心になっているのはクジャクヤママユという蛾である。私の大嫌いなヤママユガの一種だ。しかも冒頭でモーアが「私」にこの追想を語り始めたきっかけというのが、「私」が最近（子供と一緒に）また「蝶の」採集を始めた、と話し、ひとつの標本をモーアに見せたことだった。だがその標本の「蝶」というのはワモンキシタバという蛾である。何故「蝶」と言いつつ蛾の話ばかりするのだろうか。中学一年の私は釈然としない気持ちを禁じ得なかつた。だが私は疑問があっても教師に質問をするようなタイプの生徒ではなかつたため、この問題を国語教師に問い質すこともしなかつたし、また授業が終われば教科書の内容などすぐに忘れてしまうので、級友とこの問題について議論することもなかつた。

た。国語の授業が次の単元に入ると、有り難いことにクジャクヤママユもワモンキシタバも忘却の彼方に飛び去ってしまい、その後何年もこの問題を思い出さずことはなかった。

その後、確か大学一年の時だったと思うが、フランス語では「蝶」も「蛾」も ‘papillon’ であるという事実を、フランス語の授業で知った。これは「パピヨン」と読む。ついであるがパピヨンという犬は、耳が蝶の羽のような形だからそう呼ばれるのだ。もちろんフランス語に蝶と蛾の区別がまったくないというわけではないが、「蛾」は ‘papillon de nuit’ あるいは ‘papillon nocturne’ (いずれも「夜の蝶」の意。ついでに、「ノクターン」は音楽用語では「夜想曲」と形容語句を付けて区別しなければならない。つまり、‘papillon’ という同じ範疇の中の下位区分、という程度の位置づけに過ぎないのである。一方英語では、日本語と同様に、蝶は ‘butterfly’、蛾は ‘moth’ というように、初めから異なった範疇に分類される。石原慎太郎はかつて、フランス語は数も満足に数えられない不完全な言語だ、と暴言を吐いたが(これはフランス語に「70」とか「80」という単語が存在せず、「60と10」(soixante-dix)とか「4つの20」(quatre-vingts)と言わなければならないことについて言っていると思われる)、私が思うにそんなことよりも蝶と蛾を一緒くたにしていることの方がよほど問題である。

このように、美しく愛らしい蝶と醜く不気味な蛾を同じカテゴリーに分類するというのは、私の常識ではまったく考えられない暴挙なのだが、フランス語におけるこのような暴挙について知ったとき、クジャクヤママユとワモンキシタバをめぐる疑問をふと思出し、もしかするとドイツ語においても同じような狼藉が行われているのではないかと、思い至り、ドイツ語選択の友人に手伝ってもらいつつ慣れないドイツ語の辞典を借りて引いてみたりした。ドイツ語には蝶と蛾を総称する名詞が二つあり、ひとつは ‘Schmetterling’、もうひとつは ‘Falter’ である。ドイツ語では名詞の語頭はすべて大文字になるという事実も、この時に

知った。ちなみにヘッセの『蝶』の原題は *Schmetterlinge* である。そしてドイツ語で蝶を蝶と区別して言う場合には ‘Nachtfalter’ と言うのだが、これも「夜の蝶」(Nacht + Falter)を意味する。だがいずれにせよ、ドイツ語の世界でも蝶と蛾は同じものと認識されているのだ。だから「私」とモーアは、「蝶」と言いつつ蛾の話ばかりしていたのだ。生物学的なレベルは別として、日常会話のレベルでは可憐な蝶と醜悪な蛾が、あるう事が同一の生き物と考えられているのである。

その後何年も経ったある日、ふと他の言語ではどうなのかということが気になり、手許に辞書があった言語のみだが、蝶と蛾について調べてみた。アイルランド語では ‘féileacán’ が蝶と蛾の両方を意味し、‘féileacán oíche’ が「夜の蝶」すなわち「蛾」を意味する。(そう言えば、かつて知り合いのアイルランド人から贈られたマグカップには、蛾と思しき昆虫が描かれていた。私はこれを、アイルランドにのみ生息する珍しい蝶だと思うことにして、このカップを愛用している。) ウェイルズ語で蝶を表す語句には ‘glöyn byw’、‘iâr fach yr haf’、‘pili-pala’ があり、一方で蛾は ‘gwyfyn’ である。ちなみに ‘glöyn byw’ は原義が「石炭の(黒い?) 生き物」らしいのでおそらくは黒い蝶のこと、‘iâr’ は「雌鳥」、‘haf’ は「夏」だがそれ以上のことは不明、‘pili-pala’ は純粋に「蝶」という意味のようだ。いずれにせよ、ウェイルズ語では蝶と蛾が真っ当に区別されている。スペイン語では ‘mariposa’ が蝶と蛾の両方、‘mariposa nocturna’ が「夜の蝶」すなわち「蛾」、さらに ‘polilla’ が「蛾、もしくは蛾の幼虫」である。スペイン語の専門家が身近にいないので確認できないが、おそらくは羽が大きくて普通に飛ぶ蛾と、蚕蛾のように飛ばない蛾を区別して、後者を ‘polilla’ と称しているのではないだろうか。ラテン語では ‘papilio’ が蝶と蛾、‘blatta’ がゴキブリと蛾、‘tinea’ が地虫、ウジ虫、蛾である。ここでは蛾が三種類に分類されている。蝶のような形のもが ‘papilio’ (フランス語の ‘papillon’ はこれを語源とする)、ゴキブリのような形のもが

‘blatta」、そして羽が小さくあまり飛ばないものが‘tinea’なのであろう。そして中国語では、蝶が「蝴蝶」、蛾が「蛾子」である。流石に4000年の歴史を誇る中国文化においては、美しいものと忌まわしいものが真っ当に区別されている。

このように、事物や概念の分類の仕方は言語によって異なるものである。例えばH₂Oという物質は液体の状態の時、日本語ではその温度によって「水」と「湯」というように呼称が変化する一方で、英語ではペットボトルに入っているも薬罐の中で沸き立っていてもつねに‘water’と称される。英語でどうしても「湯」を区別して言いたいときには、‘hot water’というように形容詞を用いなければならない。日本語の「絵」は「水彩画」、「油絵」、「線描画」などの総称だが、英語では水彩画と油絵が‘painting」、線描画が‘drawing」という分類になり、さらにこれらの「絵」と「写真’photograph(s) / ‘photography」、映画’film’を総称した‘picture’という上位概念がある。日本語でこれらを総称するには「画像」、「映像芸術」など、文脈によって言い換えなければならない。また英語には、日本語で言う「絵」だけを区別して言う語がない。一方で日本語で「蜂」と総称している昆虫を英語では‘bee’、‘wasp’、‘hornet」に分けている。最初の‘bee’はミツバチ、ハナバチなどで、特にミツバチに限定するときには‘honeybee」と言う。日本では蜂マニアというのはあまり一般的でないようだが、英国ではミツバチやハナバチは蝶の次に人気のある昆虫だ。次の‘wasp’は『ジーニアス英和辞典』では「ジガバチ、スズメバチ」と定義されているが、英国には日本にいるような種類のスズメバチは棲息していないため、英語で‘wasp’と言えば普通はアシナガバチを指す。最後に挙げた‘hornet’は「スズメバチ、クマバチ」など大型の蜂を指すが、この単語自体を英国で耳にした記憶はない。「シマウマ」は日本語なら「縞模様のある馬」ということで、馬の一種と捉えられているが、英語では‘zebra」という、‘horse’とは無関係の生き物である。日本語では「腕時計」も「柱時計」も「時計」だが、

英語では‘watch’と‘clock’は別のものである。ちなみに、床に設置するタイプの大型の柱時計を英語で‘grandfather clock」という。

たとえば馬が走る速度によって動詞を使い分ける習慣が日本語にはなく、ただ「走る」としか表現できないが、英語では遅い方から順に‘amble’、‘trot’、‘pace’、‘canter’、‘gallop」と使い分ける。一般に家畜関係の語彙は英語の方が日本語より遙かに細かく分けられている。牛は日本語ではまず「牛」という総称があり、そこに形容語を付加して「子牛」、「肉牛」、「乳牛」などと称するが、英語では‘bull’（去勢されていない雄牛）、‘bullock’（去勢された雄の荷役用の牛）、‘calf’（子牛）、‘cattle’（集散的に家畜としての牛）、‘cow’（雌牛、乳牛）、‘heifer’（子を産んでいない若い雌牛）、‘ox’（去勢された雄牛）、‘steer’（去勢された食肉用の雄牛）と呼び分けなければならない。そうなると例えば車の助手席に乗って英国の田舎道を走っているときなどに、前方に一頭の牛がいて、しかも運転者がそれに気付いていない様子だったりした場合、「気を付けろ、牛がいるぞ」と言おうとしてその牛がこれらのうちどれなのかをとっさに判断できず、言い淀んでいるうちに車が牛に激突してしまった、というような珍事が起こりかねないような気もするが、そういう時にはとりあえず‘cow’と言っておけばよい。「豚」の場合には英語にも‘pig’という総称があるが、その下位区分として‘boar’（去勢されていない雄豚）、‘hog’（去勢された雄豚）、‘sow’（雌豚）、‘piglet’（子豚。これは単に‘pig’に「小さいもの」を示す接尾辞‘let’が付いただけ）などがある。

逆に英語では‘rice’としか言わない所を日本語では「稲」、「籾」、「米」、「御飯」あるいは「飯」、「ライス」（一説によると茶碗に盛られているのが「御飯」あるいは「飯」で、皿に盛られているのが「ライス」だそうだ）と呼び分けるという例もある。また日本語では服を「着る」、靴を「履く」、帽子を「被る」、マフラーを「巻く」、ベルトを「締める」、眼鏡を「かける」、指輪を「はめる」、リュックサックを「背負う」、髭を「生やす」、香

水を「つける」、表情を「浮かべる」と動詞を使い分けるのに対して、英語ではすべて 'put on' と 'wear' で表現する（前者が身につける動作、後者が身につけている状態。たとえば「髭」には前者は用いないが、付け髭の場合には用い得る）。

これはよく引き合いに出される例だが、英語には「兄」と「弟」、「姉」と「妹」の区別がなく、単に 'brother' と 'sister' である。どうしても区別したいときには 'elder sister' なり 'little brother' なりと形容詞を用いるが、通常は殊更に区別しない。そして英語には「先輩」「後輩」に相当する語が存在しない。要するに日本語文化圏では年齢の上下が大いに問題になるのに対して、英語文化圏ではそれが大した問題ではない、ということである。また日本語では、一人称（「私」「僕」「俺」「拙者」「それがし」など）と二人称（「あなた」「君」「お前」「貴様」「汝」など）に気が遠くなるほどのヴァリエーションがあるが、英語ではつねに 'I' と 'you' である（二人称には古くは単数形の 'thou' と複数形の 'ye' があったが）。これはもちろん、日本語を使う社会の方が人間の上下関係に敏感だという事実を反映している。

他にもたとえばイヌイットの言語には「粉雪」や「牡丹雪」などいろいろな雪を表す語彙が数多存在するが「雪」という総称は存在しないと、ロシア語には「荒い毛織物などが肌にちくちくする」ということを一語で表す動詞があるとか、イタリア語にはマカロニの種類を意味する単語だけでも500語以上あるとかいった事実が如実に示すように、事物や現象の境界線は言語によって大きく異なり、またどんな言語もつねに様々な形でその国や地域の文化を反映する。

ところで、言語の話とは別なレベルで、実に許し難い話だが、蝶と蛾の生物学的分類の境界線はそれほど絶対的なものでもないらしい。例えばセセリチョウ科の蝶は実は蝶と言うよりもむしろ蛾に近いという。近い将来この種の蝶についての研究が進んで、これらが蛾に分類し直された場合、私はそのニュースを読んだ瞬間からこの種の蝶には触れることが出来なくなるであろう。また、私

の個人的見解では、ヤマキマダラヒカゲとサトキマダラヒカゲ（私の小学校時代にはこれらは単に「キマダラヒカゲ」という一種の蝶だったが、のちに別種と見なされるようになった）は是非とも蛾に分類して欲しい。幼少の頃から私は、蝶の中でもこの種類にだけは（羽の模様が不気味すぎるので）触ることが出来なかったのだ。